

## 井上廣子—新たな写真作品

大阪生まれの写真家・ビデオ作家・彫刻家の井上廣子は1999年から日本とドイツの双方で暮らし、2000年にはルール地方ミュルハイムにアトリエを構えた。日本とルール地方を行ったり来たりしながら、ときおりベルリンやウィーン、デュッセルドルフでも活動している。彼女は写真、インスタレーション、写真彫刻で社会的テーマに熱心に取り組んでおり、近年ますます環境問題やテクノロジー問題が作品において決定的役割を果たすようになっていく。

井上は文学・人類学・彫刻を専攻した後、沖縄の文化人類学研究所で染・織技法を専門的に学んでおり、写真作品にはその特徴がよくあらわれている。いかなる布地を用いて、いかなる質感を出すかは彼女の写真にとって、光や影と同じような意義をもち、隠蔽と暈し、可視化と露出に彼女ならではの手法がある。

アーティストにとって大事なのは、日常世界の隠された次元や抑圧された次元を強調することだ。1995年の阪神大震災という深く大きな障害を与える体験に刺激され、井上は、社会的トラウマならびに個人的トラウマに取り組もうという思いを強くする。福島震災は高度のテクノロジー文明とその進歩に対する盲信、人間によって完全に支配されえない自然・環境との相克を浮かび上がらせ、それが彼女の主要テーマとなっている。

「Mori-森」シリーズは、日本やドイツの森で撮影した作品に暗室でさらに手を加えたものだ。撮影した写真に第二の層のように刷毛・ブラシ痕を残すと、その痕跡が一義的ではない神秘性を醸し出す。生成と消滅の循環を繊細に意識させながらも、みずからの歴史を明かすことのない森が作品となってあらわれる。かつてドイツ工業の中心地で、技術工業によって全的に自然の姿が変わってしまったことが至る所でうかがえるルール地方は、井上にとって、生まれ故郷である日本の森の風景と同様に、理想的な活動の場である。

このアーティストはみずからの作品がもたらすインパクトを次のように省察する。「2011年3月11日東日本大震災と津波。あの日テレビに映し出された映像は、無数の人々の生命が、全財産が、木の葉のように津波に呑みこまれていくさまを見せました。それを私は決して忘れることができません。目下、世界中で気候が変化しています。私たちは生活を純然たる物質主義的な方法で満足させようとするのではなく、あらゆる次元で消費を制限することで後々まで残る社会形態を見出してゆかねばならないと私は思っています」。

「Mori-森」シリーズと並行して生じた写真「Mizu-水」シリーズで、井上は、あらゆる工業化の波によって姿が変わったにもかかわらず、ライン地方やルール地方の感銘を与える河川風景になお見られるような、自然のすばらしい美と力をめざして手探りで進んでゆく。だが彼女が感情こまやかに光と影の処理をしながら、生命の永遠の循環を、生成と消滅を、死と再生を作品におさめようとしているのは、とりわけ日本古来の聖なる河川である。その際に彼女の写真作品は新たな次元を獲得する。井上はライトボックスを設置し、

その光景が実際にいま目の前にあるかのような効果を生み出す——写真の光景が壁から空間へと広がってゆき、身体感覚に訴えるともいえる手法で鑑賞者を魅了する。空間インスタレーション「Koya-高野の光」2015 では部屋全体を用い、壁に写真を張りめぐらせ、床は、あずまやが映し出された水面が続くように見せている。鑑賞者は繊細に演出された芸術作品全体の一部となる。作品全体が放つ圧倒的な力と美は、人間とその技術文明によって自然がますます脅かされているように思われる世界の脆弱な状態に対して、注意を喚起することだけを目指している。井上の写真作品は、自然の摂理は同時に人間の本性であり、外的自然は同時に人間の内なる自然でもあること、すなわち人間自身が自然の一部であることを再び理解すべきだと呼びかける。井上廣子の作品は何年も前から、その推進力と感覚的に把握できるモデルを供給している。

ゼップ・ヒーキッシュ=ピカルド 2016年9月